令和５年度　努力点　グランドデザイン

１　到達目標（ビジョン）

目指す子ども像：主体的に学ぶ子ども

主体的に学ぶ子どもとは、

自分の課題を見付け、解決していく子ども

のことである。

令和３年、「教育課程部会における審議のまとめ」（中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会）では、今後の教育課程の在り方について、学習指導要領において示された資質・能力の育成を着実に進めることが重要であり、そのためには新たに学校における基盤的なツールとなるＩＣＴも最大限活用しながら、多様な子どもたちを**誰一人取り残すことなく**育成する「個別最適な学び」と、子どもたちの多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」の一体的な充実が図られることが求められるとされている。このことから、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげることが求められていることが分かる。

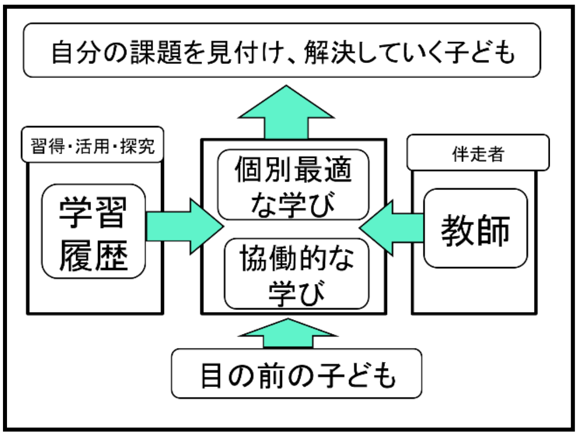
令和３年「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現（答申）」（中央教育審議会）では、「個別最適な学び」について「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理されており、児童生徒が自己調整しながら学習を進めていくことができるよう指導することの重要性が指摘されている。それぞれについては、以下のように示されている。

「指導の個別化」：	支援が必要な子どもにより重点的な指導を行ったり、子ども一人一人の特性や学習進度、学習到達度に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行ったりすることで、全ての子どもに基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させることができるようにすること。
「学習の個性化」：	一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子ども自身の学習が最適となるよう調整することができるようにすること。

昨年から筒井小学校においては、ＩＣＴを活用した、個別最適な学びがどのようなものかについて、追究してきた。自分の課題を設定する時間を設けたり、ＩＣＴを活用し、学習進度を把握させたりしながら、学習を進めてきた。協働的な学びについては、個別最適な学びの成果を学び合うことや、すでに行っている協働学習にＩＣＴを取り入れることなどによって触れてきた。これらの実践を通して、教師は意図的に子どもに自己決定をさせる場面が増え、子ども自らが何を学ぶのかのめあてを設定し、生き生きと学習に向かっていこうとする姿が見られた。しかし、学習全体への見通しをもって学習に取り組んだり、自分自身の学習を振り返り、修正をしていくことができずに、学習を始めてみたものの次に何をするのか、さらにどのように学習を進めていくのかを見付けることができずに、学習の継続がうまくいかなかったり、学習を深めたりすることができない姿も見られた。

そこで、今年度は児童がさらに主体的に課題を見付け、取り組む姿を育てるために、単元内で

の数時間の見通しを立てる活動に取り組みたい。昨年度は１授業内での自分のめあてや見通しを決め、振り返りを行う実践を行ってきたが、本年度は、単元または、単元の中の数時間を通しての計画を作る。そして、履歴を振り返ることで、本時の自分の課題を児童自らが見付けて主体的に取り組む姿を育てていきたいと考える。また、教師は、子どもが最適解を得ることができるように伴走者として働き掛ける。さらに個別最適な学びが孤立した学びにならないように、学びの成果を共有することや、協働学習により、協働的な学びについても触れていく。



2　目指す子どもに必要な力

・自分の課題を設定する力（本時の目標とは別に自分の課題を設定していく）
・課題を解決していく力（自分の課題に対して振り返りを行い修正していく）

二つの力を学年の実態に合わせて、身に付けていきたい。

3　テーマ

主体的に学ぶ姿を引き出す授業づくり
～学習履歴を活用した子ども中心の学びを目指して～

4　研究計画

学習履歴を活用しためあての設定や振り返りを行うことで、学習の見通しを立て、主体的に学ぶ姿を引き出す。(個別最適な学びの種類を増やす) 子どもが自ら学び、最適解を獲得できるように、伴走者として教師は働き掛ける。

２年目である本年度は、現職教育を行いつつ、「個別最適な学び」について知識を深めたり、実践に触れたりする。各学年で１単元選択して、計画を立て、実践を行う。

最終的には計画的に個別最適な学びを取り入れた実践ができることを目指す。

３年間の流れ

令和４年度（昨年度）

個別最適な学びがどのようなものかを追究。意図的に子どもに自己決定させる場面を設定。

令和５年度（今年度）

子どもが自ら学び、学習履歴を活用しためあての設定や振り返りを行うことで、学習の見通しを立て、主体的に学ぶ姿を引き出す。個別最適な学びの種類を増やす。

令和６年度（来年度）

子どもが自己決定をして学び、教科学習として教師が意図する学習内容である知識・技能が定着しているかを検証する。テスト、できた人数など。

５　今年度の取り組み

（１）　手立てについて

簡単な学習履歴表をつくりゴールに向かってどのように進んでいくのかを自分で考えていけるようにする。（学習履歴表の活用）単元終末時における子どもの姿（ゴール）をイメージした単元計画を立てる。（ゴールに向かってそれていかないように働きかける手立てがあるとよい）

（２）　評価について

子どもの課題を設定する様子や、達成できたかを振り返る様子などから評価する。教師がどのような支援を行い、子どもはどのような発言をしたか、どのような記述をしたかで評価する。など

（３）努力点の進め方について

①　現職教育、公開授業の指導案共有

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指した授業改善について学んでいく。

②　授業実践について

様々な教科、単元で行う。学年で１単元を選択して、単元計画をたてる。公開授業は学年で公開する授業を決め、１実践を行う。

③　事前・事後検討会について

各部会で時間を設けて行うようにする。部会を問わず参加してもよい。

④　代表授業について

２学期に１回行う。指導案の検討から学校全体で意見を出し合い、協力して準備をする。

⑤　学習指導案について

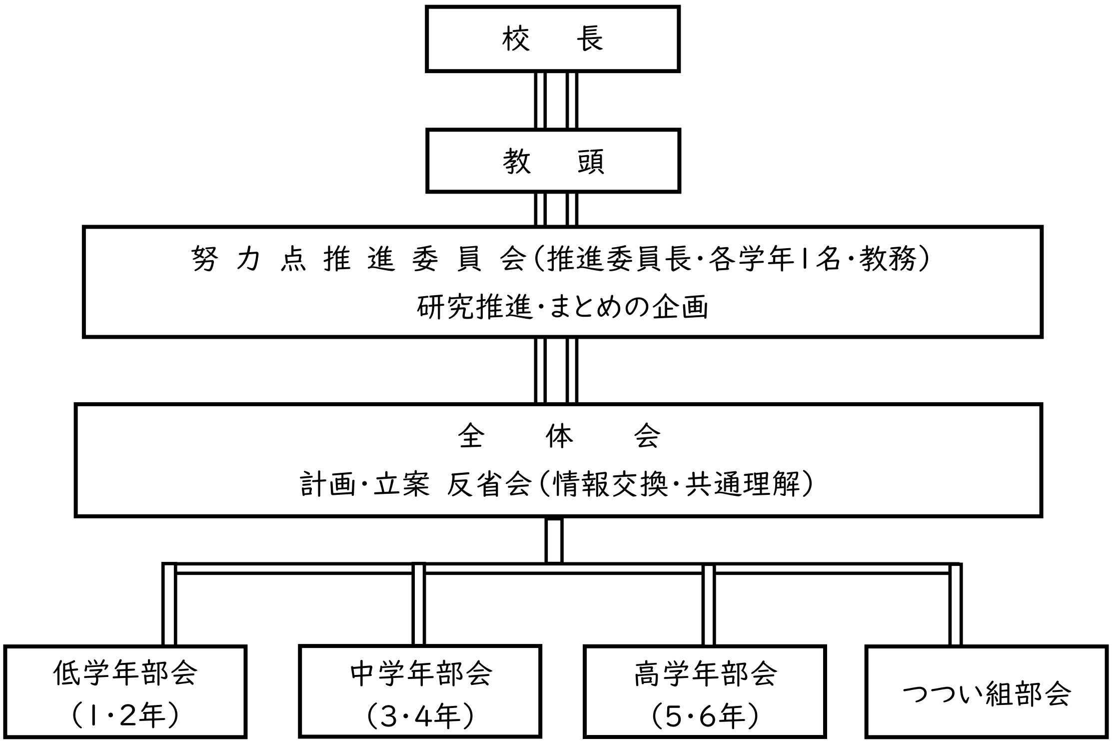
授業公開の１週間前までに、教務と推進委員長に時限と活動内容を知らせ、前日までに単元計画と略案を全職員に配付する。

⑥　最終報告について

令和６年２月１日（木）最終報告会

今年度、個別最適な学びを取り入れた実践の単元終末時における子どもの姿と学習履歴を中心にして学年で報告する。

6　研究組織



(3) 年間の研究計画

月	部　会	内　　　　容　　　※（　　）内は予定
4	・推進委員会 ・全体会	・研究推進計画検討（4/１３） ・研究のねらいと実施計画についての共通理解（4/２４）
5 6 7 9 10 11 12		・現職教育（個別最適な学びについて） ・実践の実施 ・全体授業の事前検討会（１０月上旬） ・全体授業（１０月下旬）　事後検討会（１０月下旬） ・実践のまとめ方の提案
1 2 3	 ・全体会 ・推進委員会	・実践のまとめ作成 ・最終報告会（2/１） ・来年度の計画（2/２９）

※　上記以外にも、必要に応じて推進委員会や学年部会を開く。